

さあ、今日がこの原稿の締め切り日である。いや正直いうと3日過ぎてている。催促が来ないのいいことにずるずる延ばしてしまっただ、実は間違いなく先方はやきもきしているはずなのだ。まったくもう何をしているんだ、早く書けよな。そういう怒りが充滿して電話に手が伸びるが、いやしかしもうちょっと待つてやろうか。あんまりせかすのもなんだからな。相手も苦しんでいるんだ。などといろいろな気持ちが錯綜して、こっちも大変だが発注側も真剣に大変な状態にいるはずだ。

そういえば昔の作家で、玄關の呼び音を外してしまった人がいた。編集者が原稿を取りに来て、あれ、一体どうしたんだということになったらしい。

私もそれほどではなかったが、けっこうこの原稿には苦しんだ。書きたいのに書けない。大好きなのだ。その大好きな思いを文章にしたい。しかし好きだからこそ思いを最大限に發揮したい。気持ちはふくらむ一方だが、そうなると逆に肩に力が入って書けなくなってしまう。そんな苦しみの一週間が終わって、本日よりよーデッドエンドの日を迎えた。そういうわけなのだ。

今回は思い切った形でのアルバム作りとなった。ラテン曲集である。これまでエディ・ヒギンズは断片的にラテンの曲をCDに入れてきた。それがアルバムの華になっていた。私のようなラテン好きにはこたえられなかった。しかし丸ごと一枚ラテン集というのは、作るほうにしてみればとても勇気のいることだろう。相手はラテン・ファンではなくてジャズ・ファンである。「なんだ、ラテンばっかか。やめとこよ。こうなる可能性だって十分に考えられるのである。

しかし作った。堂々と制作した。英断というほかはない。いいと思ったことは多少の危険は承知でやる。お世辞をこくわけではないが、これがヴィーナスという会社の特性の一つである。大会社ではなかなかこれが出来ない。会議の席上で反対意見が出て、結局つぶされてしまう。だからメジャーレーベルから冒険的な作品が出るのが少ないのだ。

ヴィーナスは社長一人で全部を決める。そのかわり責任も一人で負う。面白い。どうも今日はあっちこっち思いが散らばっていけない。戻そう。現代のピアノ・トリオにおけるラテン曲集は私の悲願といってもいいくらいのものである。ピアノ・トリオによるラテン曲をそっくり一枚、心ゆくまで楽しみたい。これまで、まるであまり無かった。そういえば思い出したが、シダー・ウォルトンが一枚作っていたっけ。「ベサメ・ムーチョ」などが入っておりウハウハしながら聴いたが、これが怠惰のきわみで、ゆるゆるもいいところ。ジャズ・ミュージシャンの手がけるラテン物は、ちょっと気を許すと伸びたゴムヒモみたいにになりがちなのだ。

さて、そういう観点での本ラテン曲集。ゆるみもせず、固くもなく実にいい塩梅の出来具合に仕上がっているではないか。力が入り過ぎるでもなく、へこむでもなく、もちろんラテン演奏だからといってはしゃぐ気配もない。いつものエディ・ヒギンズ通りに弾いてゆく。

私、思うのだが、エディ・ヒギンズの持ち味って見ええない情熱、見せない情熱なのではないだろうか。一体にジャズっていう音楽は見せる情熱に溢れているわけだが、エディ・ヒギンズの場合は常にそれを内側に仕舞っていて見せない。奥ゆかしいのである。その見ええない情熱によって演奏されたのが今回のラテン曲集なのだ。ヒギンズならではの奥ゆかしいラテン集といってもいいだろう。

Amor
アモール
Eddie Higgins Trio
エディ・ヒギンズ・トリオ
1. ビギン・ザ・ビギン
Begin The Beguine 〈C. Porter〉(5:03)
2. ムーン・ワズ・イエロー
Moon Was Yellow 〈F. Ahlert〉(3:50)
3. 愛の悲しみ
Tristeza De Amor 〈L. Oliveira, G. Vandre〉(4:46)
4. ペンサティバ
Pensativa 〈C. Fischer〉(6:26)
5. ある恋の物語
Histria De Un Amor 〈C. Almaran〉(4:08)
6. ジェラシー
Jalousie 〈J. Gade〉(5:06)
7. カリニョーン
Carinhoso 〈Pixinguenha〉(3:52)
8. アモール
Amor 〈G. Ruiz〉(5:20)
9. パーフィディア
Perfidia 〈A. Dominguez〉(4:44)
10. モーニング
Morning 〈C. Fischer〉(5:36)
11. コパカバーナ之夜
Copacabana Night 〈E. Higgins〉(4:40)
エディ・ヒギンズ Eddie Higgins (piano)
ショーン・スミス Sean Smith (bass)
ジョー・アシオーネ Joe Ascione (drums)
録音：2005年11月14、15日　ザ・スタジオ、ニューヨーク

© 2006 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan .
Recorded at The Studio in New York on November 14 and 15, 2005.
Engineered by Katherine Miller. Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound：Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.
Front Cover Photo：© Paul Foldes / G. I. P.Tokyo.
Designed by Taz.

近頃の若い人はラテンというとボサノバのことかと思う人が多い。私に言わせればボサノバはラテンではない。ボサノバはボサノバである。ラテンとはもっと古くからの音楽を言う。1960年代のボサノバに対して、1900年代初頭から発祥したキューバやメキシコの現地音楽をラテンと称する。あるいはアルゼンチンのタンゴをその中に含めてもいいかもしれない。

ボサノバも何曲が入っているが、メキシコで1940年代に発表された「アモール」や同じくメキシコ産のボレロ曲「パーフィデア」、それに生粋のタンゴの「ジェラシー」が入っているのがうれしい。ボレロ調の「ある恋の物語」もラテンの古典曲である。

そうしたオリジナル・ラテンを主軸に、アメリカ人のコール・ポーターが作った「ビギン・ザ・ビギン」やジャズ・ピアニスト、クレア・フィッシャーの「モーニング」、それに自作の一曲を入れての華やかで多彩なラテンの選曲になっている。

そうそう「ムーン・ワズ・イエロー」を忘れていた。これ、本邦の昔からのジャズ・ファンの好きな一曲なのである。なぜかジャズ・ファンがこの曲想を好むのだ。ジャズに通ずるもの哀しさにしびれるのだろうか。ファンのみならずジャズのミュージシャンも好んで演奏している。いちばん有名なのは1954年のアル・ヘイグのトリオ盤である。

エディ・ヒギンズはラテンのリズムで通しているが、アル・ヘイグはテーマ部のみラテンで、ソロに入ると4ビートを採用した。ジャズ・ミュージシャンのラテン曲の大抵のあしらい方とはそういうものである。ラテンというよりジャズ、なのだ。

しかし本アルバムのエディ・ヒギンズはジャズというよりラテンの気持ちでアルバム作りに取り組んだ。ずっとラテンのリズムで通している。漂

いではないか。アルバム・イメージを貫き通しているのだ。だからわれわれファンも「ラテンの気持ち」でぜひ聴きたいものである。

もうすっかりお馴染みだが、ここでもう一度エディ・ヒギンズのピアノ演奏に注目してみよう。なぜエディ・ヒギンズがこれほどまでに人気を得たのだろうか。彼が活躍した1950～60年代では考えられないことなのだ。

一つは今の時代に合っているということだろう。現在は1950～60年代と違ってジャズを無理して苦しんで聴く時代ではない。難解さを尊ぶ時代でもない。ジャズだって音楽だ。音楽なら楽しくて心地よくてどこが悪い。こういうごく当たり前のことがようやくわかったのが現代という時代なのである。こういう真実がわかるまでに実に50年ほどの年数がかかったのである。

そうすると、今の時代の代表的なピアニストとして浮かび上がってくるのがエディ・ヒギンズというわけなのだ。たとえばエディ・ヒギンズのソロを聴く。ジャズ用語でアドリブと言われる部分である。このアドリブの難解さゆえにジャズが難解な音楽と言われてきたのだ。しかしエディ・ヒギンズのアドリブは、これがアドリブかというほどわかり易い。申し訳ないくらいわかってしまう。ずっとどんどん入ってくる。ふと気が付くとアドリブを楽しく聴いているのだ。こんなことってジャズでは滅多にないことである。

エディ・ヒギンズのアドリブは、もう一つの曲になっているのである。普通のミュージシャンでいうと曲、つまりテーマは美味しいけれどアドリブは不味い。ところがエディ・ヒギンズは二度美味しいのである。エディ・ヒギンズはそうなるように

努力しているのである。いや、そうかな。ひょっとして努力ではなくて自然にそうになってしまうのかも。だとしたら大変な才能である。

ほとんどのミュージシャンは二度目も美味しくしようとしているのにそれが出来ずに、つい不味いソロを連発させてしまう。それを難解さにすり替えているに過ぎない。

たとえば「アモール」である。ソロに入って2分30秒あたりから「おおっ」という旋律が展開されてゆく。これぞ典型的なエディ・ヒギンズ・メロディーである。誰もがこういう旋律を出せるわけではない。エディ・ヒギンズだからこそ出現させられるまったく固有のメロディーなのだ。まさにもう一つの曲、なのである。

だからエディ・ヒギンズは曲好きのファンから愛される。しかし曲が嫌いなファンなどいるのだろうか。ジャズ・ファンは皆、曲が好きだ。曲から派生する曲らしいソロが大好きだ。従ってエディ・ヒギンズを皆こぞって好きなのである。

どの曲をとっても曲とアドリブの境界線が薄い。曲が終わると別の世界に持ってゆかれてボカーンとすることがない。一曲をずっと同じ気分で聴いてゆける。エディ・ヒギンズの辞書にアドリブはない。あるのは曲である。最初から最後まで曲なのである。

ラテンといえば曲のよさで有名である。ラテンから曲をとったらほとんど何も残らない。ラテンのリズムはジャズに比べ単調なものである。ラテンは曲が生命である。同じく曲が生命のエディ・ヒギンズがラテンを演じて傑作が生まれれないはずがない。

寺島靖国